

【共同研究】

いじめの被害—加害経験と自尊感情との関係 —大学生を対象にした遡及的調査研究—

吉川 延代* 今野 義孝** 会沢 信彦***

The relationship between having been bullied or bullying others and self-esteem: A retrospective study in college students

Nobuyo YOSHIKAWA, Yoshitaka KONNO, Nobuhiko AIZAWA

It has been argued that there is a close relationship between bullying and self-esteem. This study sought to determine the relationship between having been bullied or bullying others and present levels of self-esteem. Participants were 349 students (194 males and 155 females) attending two private colleges in the Tokyo area. Participants completed a questionnaire measuring the frequency, degree, age, and type of bullying behavior experienced or committed. The Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Survey was also used to measure the levels of self-esteem. This survey consisted of 10 items that revealed student self-worth, attitudes, and satisfaction with oneself. Results were as follows. In terms of the frequency of bullying, approximately 30% of the participants reported having been bullied, 30% had bullied others, and 14% had neither been bullied or bullied others in school. The peak frequency of bullying was during elementary school and it decreased as students progressed from middle to high school. Participants who reported having been bullied or bullying others had lower self-esteem than the participants who had neither been bullied or bullied others. Participants who had been severely bullied verbally and physically had lower self-esteem than the participants who were not bullied. These findings indicate that being bullied in school has a long-term impact on one's self-esteem. Lower self-esteem may lead to psychological health problems that carry into adulthood. Therefore, measures to prevent bullying and restore the self-esteem of bullied students must be taken.

Key words : having been bullied or bullying others, self-esteem, undergraduates, retrospective research

はじめに

いじめ問題は、今や深刻な社会問題となっている。文部科学省は、いじめを「子どもが一定の人

間関係のある者から、心理的・物理的攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」とであると定義し、「いじめか否かの判断は、いじめられた子どもの立場に立って行う」としている(文科省,2007年1月19日)。「平成22年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(文科省,2010)によると、いじめの認知件数は約7万5千件となり、一時期減少傾向があったものの増加の傾向にある。文部省のいじめ定義

* よしかわ のぶよ 文教大学人間科学部非常勤講師

** この よしたか 文教大学人間科学部臨床心理学科

*** あいざわ のぶひこ 文教大学教育学部心理教育課程

にもあるように、いじめ被害は子どもに種々の苦痛をもたらす。そして、不幸にも周囲の適切な援助がなかったり、子ども自身が苦痛への対処方略を持っていなかったりすると、不安、抑うつ、自尊感情の低下、心身症、対人不安、PTSD、自殺企図、不登校などの深刻な問題へと発展する。その結果、子どもたちの心身の健全な発達が長期的に阻害される恐れがある (Beane, 1998; 岡安・高山, 2000; Bond et al., 2001; Crick & Grotpeter, 1966; Crick & Nelson, 2002)。

いじめ被害の後遺症は、いじめ被害が終息した後まで引き続くことが指摘されている。吉川・今野 (2011) は、中学生を対象とした調査から、小学校時代のいじめが原因で対人関係をうまく構築できなかったり、心身に不調をきたすなどの後遺症に苦しむ生徒が多いことを報告している。荒木 (2005) は、いじめ被害経験者は、青年後期において対人的なストレスイベントを多く経験しているわけではないにもかかわらず、いじめ被害を経験していない者と比較して適応状態が悪い傾向にあると報告している。また、大学生を対象とした回顧的調査によると、いじめ被害経験者は、当時の心理的苦痛が大きいほど現時点で活動意欲の減退や抑うつ感を強く感じている (坂西, 1995; 香取, 1999; Roth et al., 2002)。Wilkins-Shurmer et al. (2003) は、いじめ被害を経験した青年における健康関連の生活の質は低下しており、特に自尊感情と精神的健康においていじめ被害の頻度が多いほど低下していることを見いだしている。また、Frisen & Bjarnelind (2010) は、就学期間の後期にいじめ被害を受けた青年は、就学期間の前期にいじめ被害を受けた青年と比較してより大きな困難を経験し、精神的な健康が低下していると指摘している。このように、いじめ被害の経験は、その後の心理的な健康に負の影響をもたらしている。

ところで、これまでの研究では、主としていじめ被害者側に焦点が当てられてきた。しかし、いじめ問題の理解には、被害者だけでなく加害者の心理的な特徴についても見ていく必要がある (嶋田・岡安ら, 1992; 岡安・嶋田ら, 1992)。岡安・高山 (2000) は、いじめ加害生徒には精神的健康の不良な者が多いことを報告している。神村・嶋

田 (1998) や Rigby (1998) は、教師との関係や友人との関係においてストレス経験の多い子どもは不機嫌・怒り反応を示す傾向が高いことや、敵意性の傾向が高い子どもほどそのようなストレスを受けた場合に他者への攻撃行動が出やすいことを指摘している。また、「児童生徒の問題行動等に関する調査協力者会議」(1996)の調査では、いじめ加害生徒がいじめによって「気持ちが悪くなった」「おもしろかった」などと述べていることが報告されている。このことから、いじめ加害生徒はストレス発散のためにいじめを行なっていることもあると考えられる。

Tehrani (2004) は、いじめ被害者だけでなく、いじめ加害者や、加害—被害に巻き込まれた者、それに加害—被害の両方の経験者にも関心を向ける必要性を指摘している。彼は、「身体的な機能」「社会的な機能」「身体的な問題による役割取得の制約」「情緒的な問題による役割取得の制約」「精神的な健康」「エネルギーと活力」「身体的な苦痛」「一般的な健康感」から構成される「健康関連の生活の質 (HRQL)」を用いて、いじめ被害者、いじめ加害者、それらの両方の経験者の健康関連の生活の質について検討した。その結果、いじめ被害といじめ加害の両方の経験者がもっとも HRQL が低いことを見いだした。

HRQLとも関連するものとして、多くの研究によりいじめと自尊感情との関係が指摘されている (O'Moore & Kirkham, 2001; Mooer, 2002; Elledge et al, 2010;)。自尊感情とは、「他者との比較によって生じる優越感や劣等感ではなく、自分自身で自己を尊重し、自己の価値を評価すること」(Rosenberg, 1965) である。いじめ被害経験は自尊感情の低下をもたらし、その影響は成人期にまで残るとされている。Cammack-Barry (2005) は、小学校時代にいじめ被害経験をした者は、いじめ被害経験のない者と比較して、被害感、敵意、全般的な不安、社交不安、低い自尊感情などが特徴的に見られることを報告している。

いじめ被害経験は自尊感情の低下をもたらすことが指摘されているが、もともと自尊感情の低い者がいじめ被害者やいじめ加害者になりやすいという研究報告も多い (Rigby & Cox, 1996; Salmivalli

et al, 1999; O'Moore & Kirkham, 2001; Yang et al, 2006)。8歳から18歳までの児童生徒を対象にしたアイルランドの全国調査 (O'Moore & Kirkham, 2001) によると、いじめ被害者はどの年齢においても自尊感情が低いことや、いじめ被害者といじめ加害者はどちらもない者と比較して自尊感情が低いこと、自尊感情の低い者ほどいじめ被害を受けたりいじめ加害をすることなどが見いだされている。また、低中所得地域の中中学生を対象にしたRigby & Cox (1996)の調査では、自尊感情の低い女子がいじめ加害に関係することが指摘されている。

このように、いじめと自尊感情との間には密接な関係があると考えられる。そこで、本研究では、一般大学生を対象にして、過去におけるいじめ経験の実態を調査するとともに、いじめと自尊感情との関係について次の2つの観点から検討する。

- (1) いじめ被害経験者、いじめ加害経験者、いじめ被害—加害の両方の経験者、いじめの経験のない者との間で、自尊感情に違いがあるか。
- (2) いじめ被害経験、いじめ加害経験、いじめ被害—加害経験の時期、いじめの様態、いじめの程度によって、自尊感情に違いがあるか。

研究方法

1. 調査協力者

調査協力者は、首都圏の2つの私立大学に在籍する学部学生362名である。調査は授業中に実施し、授業終了時に質問紙を回収した。このうち、記入漏れや回答に偏りのない有効回答者数は349名であった。その、内訳は男子194名(55.6%)、女子155名(44.4%)であった。それぞれの平均年齢は男子が19.18歳 (SD=1.07)、女子が18.76歳 (SD=.72) であった。

2. 質問紙の構成

(1) いじめ調査質問紙

いじめ調査質問紙は、筆者らが作成したもので、「いじめ被害と加害の有無」「いじめの時期」「いじめの様態」「いじめの程度」「いじめの原因」「いじめについての考え」を問うものである。調査協

力者は、小学校低学年時点まで遡って回答した。なお、「いじめについての考え」は自由記述である。本研究では、この質問項目を除く項目について検討した。

(2) 自尊感情尺度 (山本・松井・山城, 1982)

この尺度は、Rosenberg(1965)の自尊感情尺度10項目を邦訳したものであり、1因子構造が確認されている。得点は、「あてはまる」(5点)から「あてはまらない」(1点)の5段階評定で行った。

3. 倫理的配慮

調査協力の依頼にあたっては、協力者に対して本研究の目的を分かりやすく説明した。加えて、協力者は調査の途中いつでも協力を離脱することができることや、調査は匿名で行ない、データは研究目的以外には使用しないことを説明した。

結果 I : いじめの実態

1. いじめ経験の男女間比較

(1) いじめ経験者数の内訳

349名中、いじめ被害経験者は104名(29.8%)、いじめ加害経験者は108名(30.9%)であった。また、いじめ被害といじめ加害の両方の経験者は50名(14.3%)、どちらかの経験者は112名(32.1%)であった。どちらの経験もなかった者は187名(53.6%)であった。

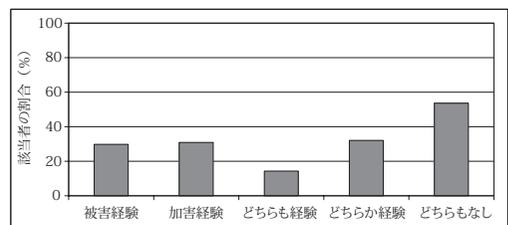


図1 いじめ経験の内訳の割合

(2) いじめ経験者数の男女間比較

いじめ被害者数の男女間比較を行なったところ、男子の46名(23.7%)に対して女子は58名(37.4%)であった。カイ2乗検定の結果、男子に比べて女子にいじめ被害経験者が有意に多いことが認められた ($\chi^2=7.739$, $df=1$, $p<.005$)。

いじめ被害経験者数についても、男子の52名(26.8%)に対して女子は56名(36.1%)であった。カイ2乗検定の結果、女子の方が多い傾向が見られた($\chi^2=3.568, df=1, .05 < p < .01$)。

いじめ被害といじめ加害の両方を経験した50名の内訳は、男子が18名(36.0%)、女子が32名(64.0%)であった。カイ2乗検定の結果、女子の方が男子よりも、両方の経験者が多い傾向が見られた($\chi^2=3.568, df=1, .05 < p < .01$)。

いじめ被害といじめ加害のどちらかを経験した112名の内訳は、男子が62名(55.4%)、女子が50名(44.6%)であった。カイ2乗検定の結果、どちらかを経験した者は男子に多い傾向が見られた($\chi^2=3.568, df=1, .05 < p < .01$)。

いじめ被害経験もいじめ加害経験もない者187名の内訳は、男子が114名(61.0%)、女子が73名(39.0%)であった。カイ2乗検定の結果、どちらの経験もない者は男子に有意に多かった($\chi^2=9.661, df=2, p < .01$)。

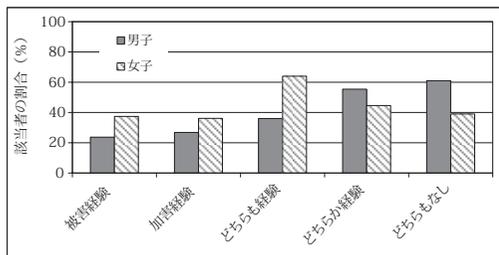


図2 いじめ被害経験といじめ加害経験の割合の男女間比較

2. いじめ経験の時期

いじめ被害経験者数は、小学校低学年が27名(7.7%)、小学校中学年が36名(10.3%)、中学校が55名(15.8%)、高校が8名(2.2%)であった。また、いじめ加害経験者数は、小学校低学年が26名(7.4%)、小学校中学年が36名(10.3%)、中学校が51名(14.6%)、高校が5名(1.4%)であった。

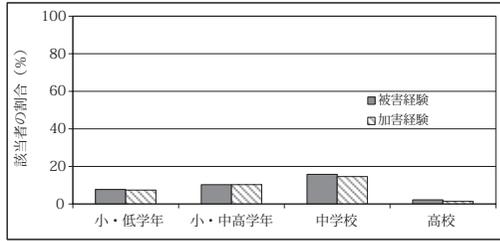


図3 いじめ被害経験といじめ加害経験の時期の割合

3. いじめの様態

(1) 様態ごとの経験者数

いじめ被害の様態を「身体的な暴力」「言語的な暴力」「無視」に分類した。それぞれのいじめ被害の経験者数は、「身体的な暴力」が16名(12.2%)、「言語的な暴力」が64名(48.9%)、「無視」が51名(38.9%)であった。同じような傾向はいじめ加害の様態についても見られ、「身体的な暴力」が9名(7.6%)、「言語的な暴力」が62名(52.5%)、「無視」が47名(39.8%)であった。

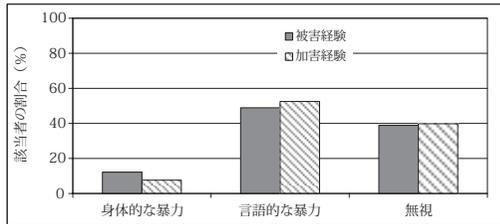


図4 いじめ被害経験といじめ加害経験の様態の割合

(2) いじめ被害の様態の男女間比較

「身体的な暴力」は男子に多く、15名(7.7%)が経験していた。これに対して女子は1名(6%)であった。「言語的な暴力」は男子の31名(16.0%)に対して、女子で33名(21.3%)に見られ、有意差はなかった($\chi^2=1.623, df=1, n.s.$)。「無視」は、女子では38名(25.3%)が経験していたが、男子では12名(6.2%)であった。カイ2乗検定の結果、女子の方が男子に比べて有意に多かった($\chi^2=25.143, df=1, p < .001$)。

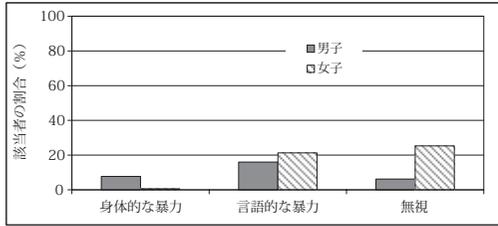


図5 いじめ被害の様態の割合の男女間比較

(3) いじめ加害の様態の男女間比較

「身体的な暴力」は男子に多く、9名(7.6%)が経験していたが、女子は2名(1.3%)に過ぎなかった。「言語的な暴力」の加害経験者は男子の39名(20.1%)に対して、女子では23名(14.8%)であったが、カイ2乗検定の結果、男女間に有意差は見られなかった($\chi^2 = 1.634, df=1, n.s.$)。「無視」は女子に多く、31名(20.0%)が経験していた。これに対して男子では12名(6.2%)であり、「無視」は女子に有意に多いことが認められた($\chi^2 = 10.212, df=1, p<.001$)。

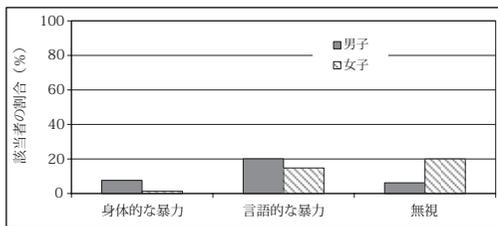


図6 いじめ加害の様態の割合の男女間比較

結果Ⅱ：いじめ経験と自尊感情との関係

1. いじめ経験の有無による自尊感情の比較

(1) いじめ被害経験と自尊感情

いじめ被害経験のある「被害経験あり群」(104名)と、いじめ被害経験のない「被害経験なし群」(245名)における自尊感情尺度の平均点は、26.79(SD=.61)と28.58(SD=.47)であった。t検定の結果、両群の間には有意差が見られた($t(1,345)=6.365, p<.05$)。

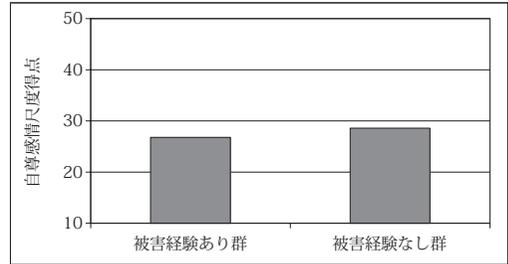


図7 いじめ被害経験の有無による自尊感情尺度得点の比較

(2) いじめ加害経験と自尊感情

いじめ加害経験のある「加害経験あり群」(108名)と、いじめ加害経験のない「加害経験なし群」(241名)の自尊感情尺度の平均点は、27.30(SD=.60)と28.07(SD=.48)であった。t検定の結果、両群の間に有意差は見られなかった($t(1,345)=.969, n.s.$)。

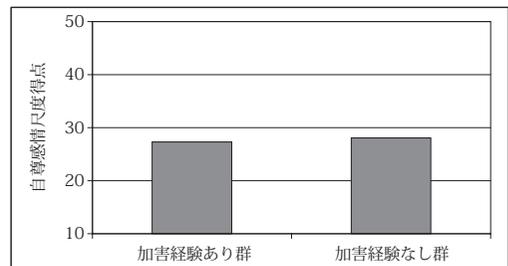


図8 いじめ加害経験の有無による自尊感情尺度得点の比較

(3) いじめ被害・加害経験と自尊感情

いじめ被害といじめ加害の両方を経験した「どちらも経験あり群」(50名)、いじめ被害といじめ加害のどちらかを経験した「どちらかの経験あり群」(112名)、いじめ被害経験もいじめ加害経験もない「どちらの経験もなし群」(187名)の自尊感情尺度の平均得点は、それぞれ26.32(SD=5.73)、27.79(SD=6.39)、28.88(SD=6.33)であった。一元配置分散分析の結果、3群の間には有意差が認められ($F(2,346)=3.574, p<.05$)。Bonferroniによる多重比較の結果、「どちらもあり群」と「どちらもなし群」の間に有意差が認められた。

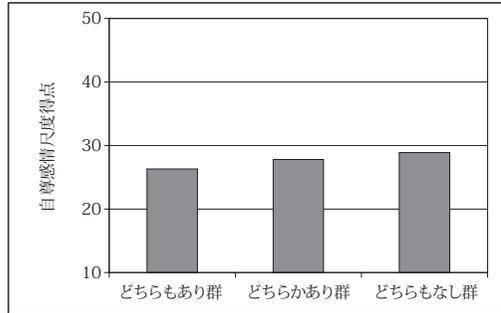


図9 いじめ被害-いじめ加害経験の有無による自尊感情尺度得点の比較

2. 自尊感情の男女比較

(1) いじめ被害経験の有無と自尊感情

「被害経験あり群」の自尊感情尺度の平均点は、男子(46名)が26.70(SD=6.05)、女子(58名)が26.90(SD=6.15)であった。一方、「被害経験なし群」の平均点は男子(148名)が29.23(SD=6.24)、女子(97名)が28.00(SD=6.47)であった。いじめ被害経験の有無と性別に関して2要因の分散分析を行った結果、いじめ被害経験の有無に関して有意な主効果が見られた($F(1,345)=6.007, p<.05$)。一方、性別の要因に関しては有意な主効果は見られなかった($F(1,345)=.481, n.s.$)。群と性別の間にも有意な交互作用は見られなかった($F(1,345)=.927, n.s.$)。

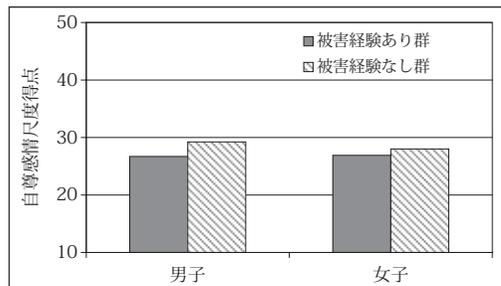


図10 いじめ被害経験の有無による自尊感情尺度得点の男女間比較

(2) いじめ加害経験の有無と自尊感情

「加害経験あり」群の自尊感情尺度の平均点は、男子(52名)が27.88(SD=5.82)、女子(56名)が26.91(SD=6.46)であった。これに対して、「加害経験なし群」の平均点は男子(142名)が28.90

(SD=6.43)、女子(99名)が27.97(SD=6.29)で、男女ともに「加害経験あり群」の自尊感情尺度得点が低かった。しかし、2要因分散分析の結果、群についても性別についても有意な主効果はなかった(群 $F(1,345)=1.994, n.s.$; 性別 $F(1,345)=1.680, n.s.$)。

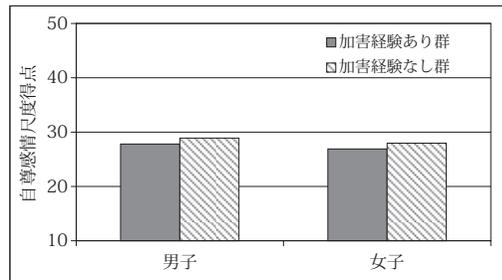


図11 いじめ加害経験の有無による自尊感情尺度得点の男女間比較

(3) いじめ被害・加害の有無と自尊感情

いじめ被害経験といじめ加害経験の「どちらも経験あり群」の自尊感情尺度の平均点は、男子(18名)が26.28(SD=4.19)、女子(32名)が26.34(SD=6.54)であった。「どちらかの経験あり群」では男子(62名)が27.94(SD=6.71)、女子(50名)が27.62(SD=6.04)であった。また、「どちらの経験もなし群」では、男子(114名)が29.38(SD=6.20)、女子(73名)が28.11(SD=6.51)であった。群と性別に関して2要因分散を行った結果、群の要因に有意な傾向が見られた(群 $F(2,343)=2.941, .05<P<.1$; 性別 $F(1,343)=.400, n.s.$)。群と性別との間には、有意な交互作用はなかった($F(2,343)=.313, n.s.$)。

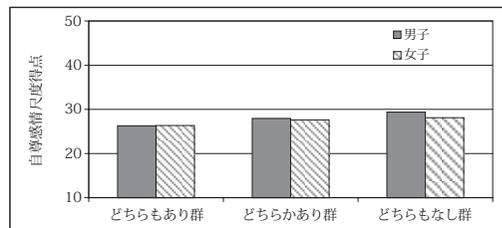


図12 いじめ被害-いじめ加害経験の有無による自尊感情尺度得点の男女間比較

3. いじめの時期と自尊感情

(1) いじめ被害の時期と自尊感情

いじめ被害の時期を小学校低学年、小学校中高学年、中学校、高校の4つの時期に分け、それぞれの時期において、いじめ被害経験の有無による自尊感情尺度得点の違いについて検討した。その結果、小学校低学年の時期における自尊感情尺度の平均点は、「被害経験あり群」(27名)が26.38(SD=5.26)、「被害経験なし群」(322名)が28.30(SD=6.39)であったが、両群の間に有意差は見られなかった($t(347)=1.489$, n.s.)。

小学校中高学年では、「被害経験あり群」(36名)が26.22(SD=6.45)、「被害経験なし群」(313名)が28.39(SD=6.28)で、両群の間には有意差が見られた($t(347)=1.965$, $p<.05$)。中学校では、「被害経験あり群」(55名)が26.76(SD=6.26)、「被害経験なし群」(294名)が28.43(SD=6.31)で、両群の間には有意差が見られた($t(347)=1.797$, $p<.05$)。

高校では、「被害経験あり群」(8名)が23.47(SD=7.36)、「被害経験なし群」(341名)が28.28(SD=6.23)であった。t検定の結果、両群の間には有意差が見られた($t(347)=2.198$, $p<.05$)。

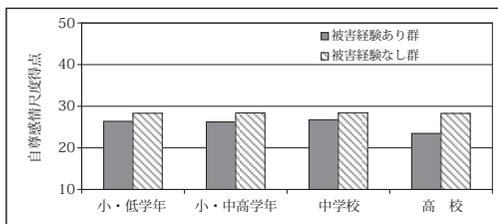


図13 いじめ被害経験の有無と時期による自尊感情尺度得点の比較

(2) いじめ加害の時期と自尊感情

小学校低学年では、「加害経験あり群」(26名)が29.27(SD=6.49)、「加害経験なし群」(323名)が28.08(SD=6.31)であった。t検定の結果、両群の間に有意差は見られなかった($t(347)=.924$, n.s.)。小学校中高学年では、「加害経験あり群」(36名)が26.53(SD=5.94)、「加害経験なし群」(313名)が28.35(SD=6.35)で、両群の間には有意な傾向が見られた($t(347)=1.645$, $.05<p<.10$)。

中学校では、「加害経験あり群」(51名)が27.10

(SD=6.12)、「加害経験なし群」(298名)が28.35(SD=6.31)であるが、両群の間に有意差は見られなかった($t(346)=1.306$, n.s.)。高校では、「加害経験あり群」(4名)が23.75(SD=8.05)、「加害経験なし群」(345名)が28.21(SD=6.30)であるが、両群の間に有意差は見られなかった($t(346)=1.403$, n.s.)。

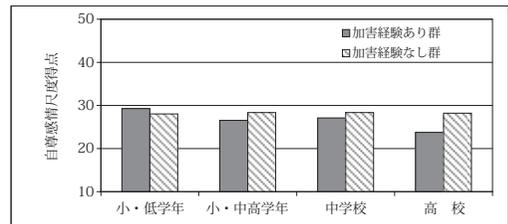


図14 いじめ加害経験の有無と時期による自尊感情尺度得点の比較

5. いじめの様態と自尊感情

(1) いじめ被害の様態と自尊感情

いじめ被害の様態を「身体的な暴力」「言語的な暴力」「無視」に分類した。「身体的な暴力」に関しては、「被害経験あり群」(16名)と「被害経験なし群」(333名)の自尊感情尺度の平均点は、24.25(SD=5.32)と28.35(SD=6.31)であった。t検定の結果、両群の間には有意差が見られた($t(347)=2.985$, $p<.05$)。

「言語的な暴力」に関しては、「被害経験あり群」(64名)の26.75(SD=26.75)に対して、「被害経験なし群」(285名)は28.48(SD=6.31)であった。t検定の結果、両群の間には有意差が見られた($t(347)=1.991$, $p<.05$)。

「無視」に関しては、「被害経験ありの群」(51名)は27.12(SD=5.83)、「被害経験なし群」(298名)は28.31(SD=6.38)で、被害経験のある群の自尊感情尺度得点が低かった。しかし、t検定の結果、両群の間に有意差は見られなかった($t(346)=1.251$, n.s.)。

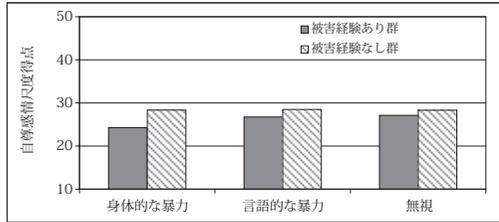


図15 いじめ被害経験の有無と様態による自尊感情尺度得点の比較

(2) いじめ加害の様態と自尊感情

いじめ加害の様態についても、いじめ被害と同様に「身体的な暴力」「言語的な暴力」「無視」に分類した。「身体的な暴力」については、「加害経験あり群」(9名)が26.44(SD=4.79)、「加害経験なし群」(340名)が28.21(SD=6.36)で、加害経験のある群の得点が低かった。しかし、両群の間には有意差は見られなかった($t(347)=1.767$, n.s.)。

「言語的な暴力」に関しては、「加害経験あり群」(62名)が27.50(SD=6.49)、「加害経験なし群」が(287名)が28.31(SD=6.29)であったが、両群の間には有意差は見られなかった($t(347)=.914$, n.s.)。

「無視」に関しては、「加害経験あり群」(47名)が27.00(SD=5.36)、「加害経験なし群」が28.35(SD=6.45)であり、「加害経験あり群」の自尊感情が低かった。しかし、両群の間には有意差は見られなかった($t(346)=1.360$, n.s.)。

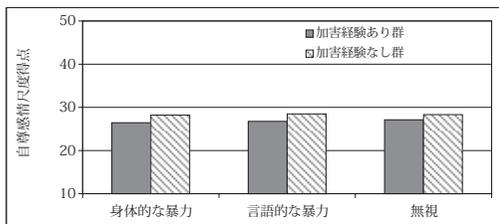


図16 いじめ加害経験の有無と様態による自尊感情尺度得点の比較

6. いじめの程度と自尊感情

(1) いじめ被害の程度と自尊感情

いじめ被害の程度を、「激しかった」「それほどではなかった」「被害なし」に分類した。「激しかった群」(59名)の自尊感情尺度得点は26.19(SD=5.81)、「それほど激しくなかった群」(45名)

は26.73(SD=6.47)、「被害なし群」(245名)は28.72(SD=6.33)であった。一元配置の分散分析の結果、3群の間に有意差が見られた($F(2,346)=4.011$, $p<.05$)。さらにBonferroniによる多重比較を行った結果、「激しかった」群と「被害なし」群の間に有意差が見られた。

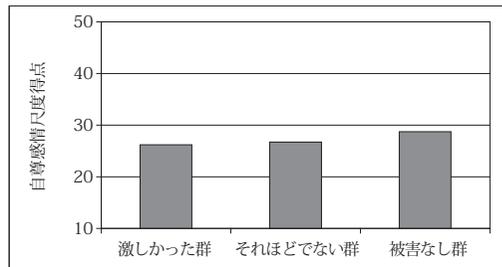


図17 いじめ被害経験の程度による自尊感情尺度得点の比較

(2) いじめ加害の程度と自尊感情

いじめ加害の程度に関しても、いじめ被害の程度と同じように、「激しかった」「それほどではなかった」「被害なし」に分類した。それぞれの群の自尊感情尺度得点は、「激しかった群」(42名)が27.76(SD=6.14)、「それほど激しくなかった群」(45名)が27.30(SD=6.12)、「加害なし群」(245名)が28.49(SD=6.41)であった。加害経験のない群に比べて、「激しかった群」と「それほど激しくなかった群」の自尊感情尺度の得点が低かった。しかし、3群の間に有意差はなかった($F(2,346)=1.033$, n.s.)。

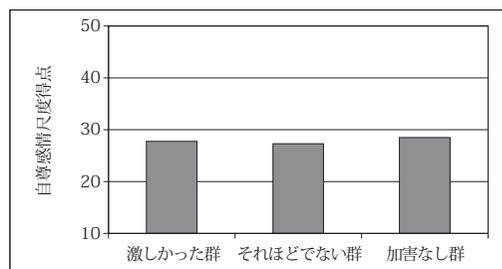


図18 いじめ加害経験の程度による自尊感情尺度得点の比較

考 察

1. いじめの特徴について

いじめの出現頻度に関して、本研究では、いじめ被害経験者は29.8%、いじめ加害経験者は30.9%で、いじめ被害といじめ加害の両方の経験者は14.3%、どちらかの経験者は32.1%という結果が得られた。Frisen & Blanelind(2010)の結果では、いじめ被害経験者は23.4%、いじめ加害経験者は23.2%、被害と加害の両方の経験者は7.8%であった。また、埼玉県教育委員会(2007)のいじめに関する実態調査結果報告書の概要によると、いじめ被害経験者は37.9%、いじめ加害経験者は35.6%、両方の経験者は18.5%であった。これらの研究の値は必ずしも同じというわけではないが、それぞれのいじめの経験者の割合の傾向は似ているといえる。

いじめの時期との関連について、本研究では、いじめ被害経験者の割合は小学校で18%、中学校で15.8%、高校で2.2%であった。また、いじめ加害経験者は、小学校で18.1%、中学校で14.6%、高校で1.4%であった。従来の研究によると、いじめの件数は、いじめ被害に関してもいじめ加害に関しても、小学校が最も多く、年齢が高くなるにつれて減少する傾向があるが、本研究でも同じような傾向が認められた。

本研究では、いじめ被害経験者もいじめ加害経験者も女子の方が男子よりも多かった。同様の傾向は多くの研究でも報告されている。とりわけいじめの様態に関して、女子では「無視」が多いという結果が報告されている。

男女間の違いについては、本研究では、いじめ被害経験者は男子の23.7%に対して、女子は37.4%と有意に多かった。いじめ加害経験者についても女子の方が男子より多く、男子の26.8%に対して、女子は36.1%であった。これに対して、文部科学省(2010)の調査によると、いじめの認知件数は全体的に男子が多く、小学校1年生と高等学校1～3年生では男子対女子がほぼ6対4の割合になっていた。これに対して、埼玉県教育委員会(2007)いじめに関する実態調査結果報告

書の概要によると、いじめ被害の経験は小学校では男子の方が多いが、中学と高校では女子の方が多く、全体的にも女子の方が男子よりもいじめの被害経験が多いという結果が報告されている。埼玉県の結果は、本研究の結果と共通するものである。三島(2003)も、女子の方がいじめの被害体験が有意に多いことを指摘している。

埼玉県の調査では、「仲間はずれ」「無視」は女子に多く、「暴力」は男子に多い傾向があるとしているが、これについても本研究の結果と一致している。岡安・高山(2000)も、いじめにおいて、「仲間はずれ・無視・悪口」などの関係性攻撃および言語的攻撃においては女子が多く、「叩く・蹴る」などの身体的暴力は男子に多いことを指摘している。

文科省の調査結果と本研究および埼玉県の調査結果の違いの理由は、それぞれの調査方法の違いに起因していると思われる。文科省の調査はいじめの認知件数となっているが、これは本人以外の第三者の発見・通告に基づく数値である。第三者によって発見されやすいいじめの様態の大部分は暴力や暴言などいわゆる顕在化したいじめであり、これらのいじめは男子に特徴的なことから、いじめの認知件数が男子に多いという結果になったものと思われる。これに対して、女子のいじめは無視や仲間はずしのような関係性いじめが多く、外からは発見しにくいことが文部科学省のような結果になったものと思われる。また、本研究と埼玉県の調査では本人の自己申告形式をとっているため、関係性いじめのような潜在化しやすいいじめをとらえることができたものと考えられる。こうした関係性いじめが女子に多い理由として、Eder & Hallinan(1978)は、女子の方がより排他的な人間関係であることを挙げている。三島(2003)も、男子に比べて女子の友人関係における排他性が高いことから、女子の方がいじめが多いと説明している。

2. いじめと自尊感情について

本研究では、いじめ被害経験者は、いじめ被害の経験がない者と比較して、自尊感情が有意に低かった。いじめの様態と自尊感情関係については、言語的な暴力被害や身体的な暴力被害を経験した

者の自尊感情は、これらの被害経験のない者よりも有意に低かった。また、これらのいじめ被害の程度が激しかったと答えた者は、いじめ被害経験のない者と比較して有意に自尊感情が低かった。これは、いじめ被害経験が自尊感情の低下と関係することを指摘した従来の多くの研究結果と一致している(O'Moore & Kirkham, 2001; Mooer, 2002; Elledge et al, 2010; Cammack-Barry, 2005)。

いじめ被害の時期との関係では、小学校中高学年から高校にかけていじめ被害を経験した者は、経験しなかった者よりも自尊感情が有意に低かった。いじめ加害経験との関係については、全般的にいじめ加害経験者の自尊感情は低い傾向にあったが、統計的な有意差は見られなかった。しかし、いじめ被害といじめ加害の両方を経験した者の自尊感情は、どちらの経験もない者と比較して有意に低かった。この結果は、O'Moore & Kirkham (2001)の知見と一致している。このことから、いじめ被害といじめ加害のどちらも経験している者の自尊感情の低さには、いじめ被害経験がより大きく関係していると推測される。

ところで、いじめ被害経験者における自尊感情の低さは、いじめ被害の影響によるのか、あるいはもともと自尊感情が低い者がいじめ被害の対象になってしまうのかという問題がある。従来の研究の多く(O'Moore & Kirkham, 200; Salmivalli et al, 1999; Callaghan & Joseph, 1995; Olweus, 1992)は、いじめ被害を経験しやすい子どもの特徴として、情緒的に不安定で劣等感が強いことや自尊感情が低いことを挙げている。古くは、わが国の文部省発行小学校生徒指導資料3「児童の友人関係をめぐる指導上の諸問題」(1984)でも、「性格の面では、わがままで依存心の強い」「小心で過敏」「自己顕示欲が強く、反抗したりしやすい」「本人の体力や体格、容貌」といった特徴をもつ者が、周囲に反感を持たれたり、嫌われたり、違和感を持たれて攻撃を受けやすいとされている。もちろん、こうした特徴があるからといって、いじめをしても良いという正当な理由になるわけではない。しかし、こうした特徴をもつ者がいじめ被害の標的とされているという現実は一貫して受け止めなければならない。

一方、本研究では、いじめ加害経験のある者はない者と比較してやや自尊感情尺度得点が低いが、その差は有意ではなかった。また、いじめ加害を経験することによって否定的な自己像が形成され、その結果自尊感情が低下することも考えられるが、重回帰分析の結果からは、いじめ加害経験と自尊感情尺度得点の間には関係が見られなかった。このことから、本研究ではいじめ加害経験によって自尊感情が低下するということは確認されなかった。しかし、自尊感情の低い者がいじめ加害と関係することを指摘する研究は少なくない。Rigby & Cox (1996)は低所得地域の中学生を対象にした調査によって、自尊感情の低い女子がいじめ加害に関与することを見いだしている。O'Moore & Kirkham (2001)やYang et al.(2006)も、いじめ加害者の自尊感情の低さと関係することを指摘している。それでは、なぜ自尊感情の低い者がいじめ加害を引き起こすのであろうか。この点について、速水ら(2004)は、仮想的有能感という観点から考察している。仮想的有能感とは、「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能の感覚」と定義されている(速水, 2006)。仮想的有能感が高い者は、ストレスを緩和するために「自分より下」と思っている相手にいじめを行なうと考えられる(小平・小塩・速水, 2007)。このことは、裏を返せば、自尊感情の低い者は自分よりも「劣っている」と思う相手をストレス発散の標的としていじめを行なっていると考えられる。このことから、仮想的有能感とは、真の有能感ではなく、自分の劣等感や自己不全感の過剰補償作用であり、低い自尊感情が背景にあると考えられる。

3. いじめ予防・改善における自尊感情の機能

本研究では、いじめ被害経験といじめ加害経験と自尊感情との間には一定の関係のあることが見いだされた。このことは、逆の見方をすれば、自尊感情の強化・育成を通していじめの予防・改善が可能であることを示唆している。Spade (2007)は、自尊感情の上昇にともなっていじめ行動が減少することを見いだしている。Salmivalli et al.(1999)

は、いじめ被害者を守る者は自尊感情が高いことを指摘している。また、Westermann (2008) は、ソーシャル・サポートによって、いじめ被害・加害などのリスクの高い者の自尊感情を保護する効果があると述べている。

一方、自尊感情と学校風土との交互作用を指摘する研究もある。Gendron, Williams, & Guerr (2011)は、学校風土をネガティブであると知覚した場合、高い自尊感情はより高いいじめの準備性と関係するが、対照的に学校風土をポジティブであると知覚した場合には、高い自尊感情はいじめの準備性を低下させることを見だしている。つまり、居心地の良くない信頼関係の希薄な学校環境のもとでは、高い自尊感情は他者を見下したり、自分自身の葛藤や欲求不満をより弱い立場の者に向けさせてしまう原因になる。これに対して、生徒一人一人が大切にされ、相互の信頼関係が形成されている学校では、高い自尊感情は自他を思いやる態度をもたらすことを意味している。また、Nation et al. (2008)は、いじめ被害者もいじめ加害者も、教師によるサポートやエンパワーメントの知覚が乏しいことを指摘している。つまり、教師によってエンパワーされないと感じている者は仲間をいじめることによって代償するか、あるいは適切な対処方略を見いだせないまま、いじめの被害者になりやすいことを示唆している。このように、孤立はいじめ被害のリスク要因である (Hodges et al., 1997)が、教師や家族、友人の存在はいじめ被害のリスクの軽減やいじめによる自尊感情の低下を防ぐ働きするとすることができる (Boulton et al., 1999; Hodges et al., 1999; 吉川・今野, 2012)。

自尊感情を高めるためには、学級や学校風土をポジティブなものにし、互いのサポート関係を育む取組が必要である。今野 (1997, 1999, 2000) は、施設風土や学校風土の改善に向けて、施設職員や学校の教師を対象に動作法のワークショップを行っている。それによると、動作法の快適な心身の体験を通して、同僚に対する思いやりの気持ちや援助的な態度が生まれ、そのことが利用者や児童生徒への思いやりの気持ちや援助的な態度の涵養につながった。さらに、職員や教師のこのよ

うな態度は、利用者や児童生徒に対してエンパワーの知覚をもたらし、その結果、利用者同士の関係や児童生徒間にも改善が見られた。このような知見は、ポジティブな学校や学級風土づくりにとって、動作法が1つの有効な方法として活用可能であることを示している。

4. 本研究の限界と課題

本研究は、大学生を対象に溯及的な調査方法を用いたため、過去のいじめに関する出来事やいじめのきっかけなどを正確に想起することが困難であると述べた者が少なからずいた。そのため、いじめの理由や原因、きっかけなどの自由記述欄が無記入となったままのデータが散見された。

また、本研究では現時点における自尊感情を評価してもらった。しかし、それが過去のいじめ経験の影響を反映したのか、それとも単に現時点での状態を反映したのか、あるいは個々人の特性を反映したのかを判別することは困難である。今後は、いじめの影響を適確に反映する方法を工夫する必要がある。

参考文献

- 荒木 剛 (2005). いじめ被害体験者の青年後期におけるレジリエンス(resilience)に寄与する要因について パーソナリティ研究, 14(1), 54-68.
- Beane, A. (1998). The trauma of peer victimization. In T.W. Miller (Ed.), *Children of trauma*. Madison, CT: International University Press.
- Bond, L., Carin, J.B., Thomas, L., Rubin, K., & Patton, G. (2001). Dose bullying cause emotional problems? A prospective study, in young teenagers. *British Medical Journal*, 323, 4808.
- Boulton, M.J., Trueman, M., Chau, C., Whitehand, C., & Amatya, K. (1999). Concurrent and longitudinal links between friendship and peer victimization: Implications for befriending interventions. *Journal of Adolescence*, 22, 461-

- 466.
- Callaghan, S., & Joseph, S.(1995). Self-concept and peer victimization among schoolchildren. *Personality and Individual Differences*, 18, 161–163.
- Cammack-Barry, T.(2005). Long-term impact of elementary school bullying victimization on adolescents. *Dissertation Abstracts International: Section B: The Science and Engineering*, 65(9–B), 4819.
- Crick, N.R., & Grotpeter, J.K. (1996). Children's treatment by peers: Victims of relational and overt aggression. *Developmental Psychopathology*, 8, 367-380.
- Crick, N.R., & Nelson, D.A. (2002). Relational and physical victimization within friendships: Nobody told me there'd be friends like these. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 30, 599-607.
- Eder, D., & Hallinan, M.T. (1978). Sex differences in children's friendships. *American Sociological Review*, 43, 237-250.
- Elledge, L.C., Cavell, T.A., Ogle, N.T., Malcom, K.T., Newgent, R.A., & Faith, M.A. (2010). History of peer victimization and children's response to school bullying. *School Psychology Quarterly*, 25(2), 129-141.
- Frisen A., & Bjarnelind, S. (2010). Health-related quality of life and bullying in adolescence. *Acta Paediatrica*, 99, 597-603.
- Gendron, B.P., Williams, K. R., & Guerr, N. G. (2011). An analysis of bullying among students within schools: Estimating the effects of individual normative beliefs, self-esteem, and school climate. *Journal of School Violence*, 10(2), 150-164.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 51, 1-7.
- 速水敏彦 (2006). 他者を見下す若者たち 講談社現代新書
- Hodges, E.V.E., Malone, M.J., & Perry, D.G. (1997). Individual risk and social risk as interacting determinants of victimization in the peer group. *Developmental Psychology*, 33, 1032-1039.
- Hodges, E.V.E., Boivin, M., Vitaro, F., & Bukowski, W.M. (1999). The power of friendship: Protection against an escalating cycle of peer victimization. *Developmental Psychology*, 35, 94-101.
- 児童生徒の問題行動等に関する調査協力者会議 (編) 1996 児童生徒のいじめ等に関するアンケート調査研究 文部省初等中等教育局
- 神村栄一・嶋田洋徳 (1998). 学校・家庭ストレスと暴力模倣が中学校におけるいじめ加害行為の発現におよぼす影響の検討と教師による介入効果の検討：学校ストレス尺度を用いた中学生に対する調査研究をもとに 財団法人カシオ科学振興財団平成10年年報, 94-95.
- 香取早苗 (1999). 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 カウンセリング研究, 32, 1-13.
- 小平英志・小塩真司・速水敏彦 (2007). 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験—抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して— パーソナリティ研究, 15, 217-227.
- 今野義孝 (1997). 仲間とのコミュニケーションを育てる動作法—特殊学級や知的障害者施設における仲間づくり— 特殊教育学研究, 35, 172-174.
- 今野義孝 (1999). 動作法のワークショップが知的障害者施設職員の態度に及ぼす効果 特殊教育学研究, 37, 41-49.
- 今野義孝 (2000). 動作法のボディ・ワークによる教師間のコミュニケーションと児童理解の促進 文教大学教育学部紀要, 34, 3-13.
- 三島浩路(2003). 親しい友人間にみられる小学生の「いじめ」に関する研究 社会心理学研究, 19, 41-50.
- 文部省 (1984). 小學校生徒指導資料3「児童の友人関係をめぐる指導上の諸問題」
- 文科省 (2010). 平成21年度「児童生徒の問題

- 行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果（暴力行為、いじめ、高等学校不登校等）について
- Mooer, J.M. (2002). Peer abuse or 'bullying' and its impact on adolescents, especially in relation to depression. *Dissertation Abstracts International: Section B: The Science and Engineering*, 63(2-B), 1038.
- Nation, M., Vieno, A., Perkins, D.D., & Santinello, M. (2008). Bullying in school and adolescent sense of empowerment: An analysis of relationships with parents, friends, and teachers. *Journal of Community & Applied Social Psychology*, 18, 211-232.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽祥子・森 俊夫・矢富直美 (1992). 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 心理学研究, 63, 310-318.
- 岡安孝弘・高山 巖 (2000). 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421.
- Olweus, D.(1992). Victimization by peers: Antecedents and long-term outcomes. In K.H. Rubin & J.B. Asendorpf (Eds.), *Social withdrawal, inhibition and shyness in childhood* (pp. 315-341). Hillside, NJ: Erlbaum.
- O'Moore, M., & Kirkham, C. (2001). Self-esteem and its relationship to bullying behaviour. *Aggressive Behavior*, 27(4), 269-283.
- Rigby, K., & Cox, I. (1996). The contribution of bullying at school and low self-esteem to acts of delinquency among Australian teenagers. *Personality and Individual Differences*, 21(4), 609-612.
- Rigby, K. (1998). The relationship between reported health and involvement in bully/victim problems among male and female secondary schoolchildren. *Journal of Health Psychology*, 3, 465-476.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- Roth, D.A., Coles, M.E., & Heimberg, R.G. (2002). The relationship between memories for childhood teasing and anxiety and depression in adulthood. *Anxiety Disorders*, 16, 149-164.
- 埼玉県教育委員会 (2007). いじめに関する実態調査結果報告書の概要
- 坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, 11, 105-115.
- Salmivalli, C., Kaukiainen, A., Kaistaniemi, L., & Lagerspetz, K.M.J. (1999). Self-evaluated self-esteem, peer-evaluated self-esteem, and defensive egotism as predictors of adolescents' participation in bullying situations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25(10), 1268-1278.
- Spade, J.A. (2007). The relationship between student bullying behaviors and self-esteem. *Dissertation Abstracts International: Section A: Humanities and Social Sciences*, 68(5-A), 1824.
- Tehrani, N. (2004). Bullying: a source of chronic post traumatic stress? *British Journal of Guidance & Counseling*, 32(3), 357-366.
- Wilkins-Shurmer, A., O'Callaghan, M.J., Bor, W., William, G.M., & Anderson, M.J. (2003). Association of bullying with adolescent health-related quality of life. *Journal of Pediatric and Child Health*, 39, 436-441.
- Williams, K.,Chamers, M., Logan, S., Robinson, D. (1996). Association of common health symptoms with bullying in primary school children. *British Medical Journal*, 313, 17-19.
- 山本真理子・松井 豊・山城由紀子(1982) 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- Yang, S.J., Kim, J.M., Kim, S.W., Shin, I.S., Yoon, J.S. (2006). Bullying and victimization behaviors in boys and girls at South Korean primary schools. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 45(1), 69-77.
- 吉川延代・今野義孝 (2011). 中学生におけるいじめとストレスの関連性についての研究 人間

科学研究, 33, 211-231.

[抄録]

本研究では、大学生349名（男子194名、女子155名）を対象に、いじめの被害—加害経験と自尊感情との関係について質問紙調査を行なった。いじめ質問紙調査では、「いじめ被害と加害の有無」「いじめの時期」「いじめの様態」「いじめの程度」「いじめの原因」「いじめについての考え」を質問した。自尊感情の測定には、Rosenberg(1965)の日本語版自尊感情尺度を用いた。いじめの経験に関して、被害経験者は29.8%、加害経験者は30.9%、被害と加害の両方の経験者は14.3%、どちらかの経験者は32.1%という結果が得られた。いじめの経験者数は、被害に関しても加害に関しても小学校が最も多く、年齢が高くなるにつれて減少する傾向が見られた。いじめと自尊感情の関係については、被害経験者は、被害の経験がない者と比較して、自尊感情が有意に低かった。いじめの様態との関係については、言語的な暴力被害や身体的な暴力被害を経験した者の自尊感情は、これらの被害経験のない者よりも有意に低かった。また、これらのいじめ被害の程度が激しかったと答えた者は、いじめ被害経験のない者と比較して有意に自尊感情が低かった。いじめ被害の時期との関係では、小学校中高学年から高校にかけていじめ被害を経験した者は、経験しなかった者よりも自尊感情が有意に低かった。この点については、今後の検討が必要である。本研究では、いじめ被害経験といじめ加害経験と自尊感情の間には一定の関係のあることが見いだされた。今後、ポジティブな学校や学級風土づくりを通して自尊感情の強化・育成を図り、いじめの予防・改善に努めていく必要が指摘された。

キーワード：いじめ被害—加害経験、自尊感情の低下、大学生、遡及的研究
